

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです
自由が一番だ。不心得者がいると制限しなければいけなくなる。

先にも述べたMランドの創業者、小河二郎会長は、人間にはもともと「良知」という心があると言います。どんな幼子でも、母の苦勞を見れば手を貸したくなりますし、川に落ちた子を見れば誰でも助けようと川に飛び込もうとします。つまり人間には、生まれつきの善なる心があるのだと言うのです。それが、良知です。しかし時として、環境や経験のなかでその良知が曇ってしまう。だから、自分がもともと持っている良知を取り戻す手伝いをする。それが、Mランドのボランティア活動だったり、挨拶であったりします。それらの活動が触媒となって、その心を取り戻す作用をしてくれる、それがMランドマジックなのです。船井先生は、徹底的な「性善説」主義です。入社当日に驚いた出勤時間簿、存在しなかった予算制度、組織図など。

「常識的をもって最善とす。それでいいんだよ。あと一つ。人徳と貫禄に挑戦しよう。この二つを胸においてくれば、会社はうまくいくんだ」決まり事を決めることを、本当に船井先生はしませんでした。あくまで性善説に則り、良識を信じて任せるのです。常識的をもって最善とする。常識は全員にある。その常識をルールとしてくれば、それでよい。各自の常識が、最善なのだ。それが、決まりでした。まさか……！と言う方もいますが、船井幸雄はそのルールで、300人の組織を上場させたのです。常識こそルール。

全社員を大人として扱い、一人ひとりの良識、常識が鍛えられることで、その人間性が成長することを、期待していたのだと、い思います。その結果が、社員の人徳になり、貫禄となるのです。よい人相にもつながるでしょう。船井先生にとって組織とは、「人間性を磨き合い高め合い、一人ひとりが成長する場」にほかならないのです。ですから、ほんのわずかな人間でも、不純な動機で約束事を破ったり、悪さをする人間がでると、大いに悲しんだはずで、「とことん自由な風土を守りたい。自由が一番ですし、自由が一番効率的なんです。だから常識的ルールは守ってほしい」何か気づくことがあると、そう語りかけました。その語り口を聞いて、何かあったのかなと少し緊張したものです。

人間は信頼されれば、応えようとしています。性善説でとことん臨めば、善的行動で応えようとしています。逆に、性悪説で臨めば、その網の目をくぐろうと知恵を働かせます。さらに規則や罰則を強めれば、より巧妙に抜け道を探します。その応酬ほど、非効率はないし、無駄はない。何より悲しいことはない、船井先生は語りました。常々そう考えて、とことん性善説を通していただと思うのです。「とにかくほめることだよ。長所を見つけてあげれば、人間は伸びる」そう語る船井先生の言葉に、「それではつけあがるし、進歩はない。叱って短所を是正することが教育だ」と反論する人が、時にいます。船井先生は、「内発」を大切にします。自ら考え、発意し、自主的に行動する人間にどう育てるかです。人間としてどう生きるか？人生の目的は何か？遠大な理想を語ることにより、人間性の目覚めを促すのです。遠回りに見えますが、その目覚めは誰に言われずとも、見張られなくても、良心に則った行動を半永久的に続ける力となります。長所伸展も同じです。「得手をほめられれば、うれしい。うれしい気持ちは、もっと自ら努力する力につながる」確かに人間は、そんな存在だと思えます。内発の力を高めることにも繋がります。内発の反対に、「外発」があります。叱られるから働く。罰せられるから守る。給与が下がらないように働く。条件反射的行動をする人間は、環境が変われば自ら働くことができないものです。船井先生は、内なる心で一人ひとりが常識的にそして自由に行動する仕組みをつくっていたのです。

船井先生は「内発」はどういうことだと言っていますか

()